立教関係校卒業者の記録（第二回）

平形千恵子氏への聞き取り記録

聞き手　奈須恵子
宮川英一
宮本正明

はじめに

立教学院史資料センターでは現在、一五〇年史編纂事業をおこなっており、本聞き取り調査も前回の調査と同様にその事業の一環として実施された。学生や卒業生が残した資料を収集することの意義については、前回の聞き取り記録の冒頭で指摘した通りである[1]。

年史編纂上の意義に加え、今回の聞き取り調査の特徴を挙げるならば、一九六〇年代前半に本学を卒業した女性の視点から語られた記録である点と、高校の教員としての経験から語られた記録である点が指摘できる。いずれも貴重な記録であるが、前者は立教大学の当時の教育の記録として、そして後者は、その教育がどのような影響を与えたのかを垣間見ることができる記録としても読むことができるだろう。

さて、聞き手の一人である宮川は、平形千恵子氏より聞き取り調査をおこなった経験があり、本調査はその継続調査に位置づけられる[2]。平形氏は一九七〇年代より関東大震災時の千葉県での朝鮮人犠牲者にたいする追悼活動や歴史研究にたずさわっておられ、現在もその取り組みを継続されている。その取り組みの一つが、一九七八年に結成された千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会[3]での活動であり、聞き手である宮川自身も二〇一七年頃より同会に事務局メンバーとして参加している。本聞き取り調査は以上のような前提があることを断っておきたい。以下、今回の調査概要について記述したい。

聞き取り調査の概要

話し手（インフォーマント）の平形千恵子氏の略歴は、表の通りである。

表　平形千恵子氏略歴

◆一九四一年、神奈川県横浜市生まれ。幼少時には滋賀県大津で成長し、その後、東京都世田谷区に移る。現在は千葉県船橋市在住。

◆一九五三年四月、立教女学院中学校に入学、その後、同高等学校に進学。

◆一九五九年四月、立教大学に入学し文学部史学科に在籍。一九六三年三月に卒業後、柏市の私立高等学校の教員として就職。その後、東京の私立高校の非常勤の講師を経て、一九六九年に私立船橋学園女子高校（現・東葉高校）の教員として就職。その間、三人のお子さんを育て、二〇〇四年に退職。

◆立教大学在学中は地理学研究会に所属し、農村調査に参加した。船橋学園で教員として働きつつ、歴史教育者協議会船橋支部会員として地域の歴史の掘りおこしをおこない、歴史教育分野の実践的な業績を残している。また、一九七八年に結成された千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会事務局の中心メンバーとして、現在も活動に取り組んでいる。共著として『いわれなく殺された人びと　関東大震災と朝鮮人』（青木書店、一九八三年）など。

聞き取り調査は、二〇一七年一〇月一二日に立教大学池袋キャンパスでおこなった。聞き手は、本センターより三名（奈須恵子、宮川英一、宮本正明）が参加した。事前に質問項目を含めて平形氏とメールによるやりとりや、対面による調査項目の伝達をおこなった。調査当日は、ご本人の許可を得て録音し、関連資料[4]を確認しながら立教大学入学以前から、立教大学在学時および卒業後の体験や経歴について聞き取りを実施した。たとえば、立教在学時のサークル活動や教職課程での経験など、興味深い体験談を本記録から確認することができる。

本誌に記録を掲載する際に聞き取り記録を再構成し、平形氏に予定稿を確認していただいた。そのため、本聞き取り記録は一定の校訂を経た記録であるが、話し手の発話をそのまま記載している部分もある。ただし、特定の学校名や人名については、聞き手側の判断で記載を見合わせたものがある。なお、前回の本誌インタビュー記録と同様に、文責については聞き手側にある。

---

(1) 奈須恵子、宮本正明、宮川英一「立教関係校卒業者の記録（第一回）　島野喜道氏への聞き取り記録」（『立教学院史研究』第一六号、二〇一九年二月）、一四四頁。

(2) 鈴木孝昌「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員　平形千恵子氏へのインタビュー記録（共同研究「関東大震災と習志野・船橋―朝鮮人虐殺の解明・追悼はいかになされたか（八）」）

『専修史学』第五二号、二〇一二年三月）、八六～一三五頁。のちに、田中正敬・専修大学関東大震災史研究会編『地域に学ぶ関東大震災―千葉県における朝鮮人虐殺　その解明・追悼はいかになされたか』（日本経済評論社、二〇一二年）、一九三～二〇二頁に改稿の上で収録。

(3) 関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の歴史については、前掲『地域に学ぶ関東大震災』の巻末に年表が記載されているので、参照されたい。

(4) 関連資料は、在学時に所属していたサークルの会誌や卒業アルバムなどである。

聞き取り記録

はじめに

――卒業なさったのが一九六三年の三月。（ご卒業してから）五四年ですね。

平形　五〇年たってから来るなんて。こんなチャンスがなければ大学には来ませんから。ありがとうございます。この間、部活の同窓会がありました。私、結局、出られませんでしたが、先日郵送された校友会誌に地理研の同窓会があったと小さな写真が載っていて、なつかしく思いました。

――現在、地理研の方とのつながりはございますか。

平形　ほとんどありません。クラブとしての取り組みには参加していないですね。あったら面白いのでしょうけれども、あまり古い人が出て行っても邪魔なんじゃないかと思うから（笑）。今の若い人とのつながりはないですね。

（一）立教女学院（中学校、高等学校）での経験

――改めまして、立教女学院在学時からのお話を聞かせてください。

実は立教学院史資料センターは、立教女学院に関する資料を十分には持っていません。同校の概要は分かっているのですが、分からないことのほうが実は多いのですね。

平形　立教女学院には、中学、高校の六年間行っていますから、大学に在籍していたときよりも長いの。私にはすごく懐かしいところです。

――立教女学院在学時は、お住まいは世田谷のほうで、中・高在学時は、井の頭線で通われていたのですか。

平形　（学校は）京王井の頭線の三鷹台駅が最寄り駅でした。井の頭公園の手前。三鷹台の駅のすぐ目の前です。

住んでいたところが、立教女学院に入ったときは下北沢で、途中で引っ越したところが東松原でした。どちらも井の頭線の沿線ですね。小田急線と井の頭線とが交差するのが下北沢ですが、今のような街ではなかった。私が小学校二年生で下北沢に越したときは、駅の周りは全部、闇市でした。本当に間口の狭い店が駅前にあって、

そこに野菜だろうが何だろうがいろんなものを持ってきて売っていた。毎日、母と買い物に行っていました。

――当時は闇市が下北沢の駅前に広がっていた。

平形　あの辺の駅前が全部そうでした。だから、そういう下北沢を覚えているから、今の下北沢に行ってもよその街に行ったみたいに感じます。この間、小学校の同窓会があって行ったんです。そうしたら、ちょっと離れたところの道路や住宅は似ていましたけど、駅前は全く知らない街でした。

小学校を終えたときに私学の受験があるわけね。うちの父は東京に通わないほう、つまり、ラッシュアワーの電車には乗らない、郊外に向かうほうに子どもをやろうと思ったらしいのです。ちょうどいいんです、乗って一五分か二〇分で、駅降りて目の前に学校があるのだから。そういう理由で姉が立教女学院に行っていて、私も行って、妹も行きました。三人全員、立教女学院卒業です。

――皆さん、立教女学院に在籍なさっていた。

平形　弟は違いますが、姉妹三人は立教女学院でした。私にとって立教女学院がよかったのは、かなり自由な学校だったということでしたね。昔は、立教女学院は築地にあって、関東大震災のときに西荻に移転。まだあの電車がなくて。昔の人はみんなあのＪＲのほうから歩いたというけど、私たちが在籍した当時は井の頭線が通っていたから、降りてすぐ目の前に学校がありました。ただし、学校の敷地に入ってから校舎まで行くのが大変なんですよ。走って行かないと遅れてしまうような、すごく広い敷地がありました。その後、短大ができて狭くなったのでしょうけど、走らないとなかなか到着しない。坂道を登って教室まで駆けつける。立教大学の池袋キャンパスと似ているのは、昔の建物だけど、教会があって講堂があって、本校舎がある。その前に芝生があって、ヒマラヤスギがあって、クリスマスにはイルミネーションがみられる。そういう感じだったわね。

中学から立教女学院に入りましたが、自由な雰囲気がありました。クリスチャンではないのにキリスト教の学校に入って、そんないやな思いをしないで過ごせました。立教は聖公会、学校としてキリスト教を学ぶのですが強制しないでしょう。それが特によかったんじゃないかなあ。のびのびと、好きなことをやって過ごせたのです。

立教女学院での班（クラブ）活動

――立教女学院在籍時は、クラブ活動はなさっていましたか。

平形　中学のときは新聞部だったかな。高校のときは、社会科部とは言わないで社会科班と呼んでいました。昔は学芸部何々班でした。だから社会科班と言ったのでは

ないかな。

――社会科班にご所属だった？

平形　たぶんそうだったと思います。いわゆる学芸部と体育部があって、部の中の一つのグループが班と言ったんじゃないかしら。

――私〔奈須〕も、女子学院という学校の出身で、やはり班という名称を使っていました。

平形　やっぱりそうでした？不思議ではないですね。

――はい。

平形　立教女学院は一学年が四クラスしかない小さな学校でした。でも今とは違って、一クラスが五〇人ぐらいいました。当時、それが当たり前だった。そこで丸々六年間ですよね。受験もなしにみんな一律に学年が上がっていくから。

――進学した方はどれぐらいなのでしょうか。

平形　それは高校に入る時のことですか？

――高校入学時もそうですし、大学に行く場合などはいかがでしょうか。

平形　だいたい四クラスが六年間、クラス替えはありましたがそのまま上がっていくわけ。

――そのまま上がっていくのですね。

平形　ええ、クラスは変わっても。それで大学に行くときにそれぞれ自分の進路を決めるわけです。だから、高校のときに新しく入ってきた人が一〇人いたかいないかだから、そのくらいの人はもしかしたら中学を卒業した後、立教女学院高等学校には進学していないかもしれない。

――補充をするという、たぶん特別な形でしか高校入学はありえなかった。

平形　そう、補充。外国から帰ってきた人や高校から入学した方が少数みられますが、あと残りは六年間は同じメンバーでした。だから、クラスは替わってもよく見知っているわけですよ。それで卒業するときは、立教大学に推薦で入れたのが三〇人、受験で二〇人ぐらいですか。あとは好き好きに何でも受験するわけです。就職した人はほんの一〇人か二〇人ぐらいでした。私たちは全体の人数を知らないけど、友達の場合は数人、就職をしたというのを聞きました。その他の方はみんな進学でした。

立教女学院卒業生の進路

平形　立教大学に行かない人のある部分は、東京大学とか女子大へ行く。私みたいなのは推薦で立教に入っちゃう。そのほかに短大から専門学校からいろいろな学校を受験をする。なかには東京芸術大学を受験するとかね。それぞれがすごく個性的でした。好きなことをやって、大きくなっていったのかな。

――一九五九年に大学に入学されていますが、同時代の

全く同じ年齢の一八歳になった方を見ると、中学や高校を出たらやはりまだまだ圧倒的に就職を選択する場合が多かったでしょうか。

平形　はい、その当時は高校に入る人が五〇％と言われていた時代です。二人に一人と言われていた。感覚的にはもう少し多いと思いますが、この中から大学に進学するというのは多くはない時代ですよね。

――その中で立教女学院の方たちは大学あるいは専門学校などにかなり進学した。

平形　そうですね。進学するのが当たり前みたいな雰囲気でした。

立教女学院での社会福祉調査

平形　さきほどのクラブの話をすると、一年間テーマを決めていろいろと活動していました。うろ覚えなのだけど、一年に入ったときに、社会福祉の取り組みで、社会福祉施設か、旧厚生省などに資料を取りに行った記憶があります。だから、今考えると大胆ですよね。自分たちが知りたいとなったら、そこへ直接行っちゃう。二年生のときにもっと面白いのは「ニコヨン」というのは分かる？

――分かります。日雇い労働者の。

平形　そう、日雇い労働者について調べる。自分たちと違う世界。夏休みだったのかな、普通の日の朝早く五時とか六時とかに、職業安定所に行きました。

いわゆる「ニコヨン」の集まる職業安定所といった現場に行っているの、女子高校生が。写真も残っていて「へえー」って思うのだけど、確かに私も記憶があって、そこで話を聞いている。

――社会調査をしているのですね。

平形　もちろん、相手してくれる人というのはそんなに多くないのでしょうけど、女の子が珍しいから相手をしてくれる人もいる。自分たちが中心になって調査したのは三年生で、当時、東南アジアがいろいろクローズアップされていたんです。

――難民をめぐる問題でしょうか。

平形　戦後の独立、新しい国づくり、生活習慣とか、一九五七年ですから、夏休みに東南アジアのインドネシア総領事館、ベトナム大使館、タイ大使館を巡ったこともあります。文化祭で発表した二五頁ぐらいのパンフレットが残っています。今、高校の社会科の先生が指導としてやるようなことをね。先生が相談に乗ったか乗っていないか覚えていないのだけど、自分たちで電話して、自分たちで行って、資料をもらってくるの。だから、好きなことをやるためにはかなり皆さん積極的だったし、私もそうでした。私はおとなしい性格でしたが、そういう

中で少し鍛えてもらったのではないかなって思います。

――面白いですね。

平形　高校生だから、ほんのちょっと取り組んだだけだけど。

――夏休みや春休みに取り組まれたのですか。

平形　そういうときの経験が私にとってはプラスになっていたのではないかな。

――そうですよね。

平形　あと、私はものすごく引っ込み思案だったので、大学に入るときに積極的になろうと自分で決めたの。

――引っ込み思案だったのですか。

平形　そうですよ。おとなしかったんです。誰も信用しないけど（苦笑）。本当に地味な、引っ込み思案だったと思うの。全く目立つほうではなかった。でも、大学のときには遠慮なく……。

　でも高校のときもあれかな。そういう中で少しは表立っていたのかしら。社会科班で毎年、講演会をやるのね。講演会に誰を招聘するのがいいかという話になったとき、当時の人だから知っていらっしゃるかしら。藤田たきさん（のちの津田塾大学学長）をお招きしました。

――藤田たきさんですか。

平形　聞いたことはあるんじゃないかな。当時、国際連合などにも出て行って活躍していた有名な女性です。この人の話を聞きたいと思い、自分で手紙を書きました。「女学校の社会科班でお金もないけども、あなたの話を聞かせてほしいと思うからぜひ」と。

　そうしたら女学院に来てくれたの。今で言うと、社会的な活動をしている有名な女性です。勝手に手書きのポスターをつくって学校中に貼って。普通の教室だから五〇人ぐらいのところですが、生徒があまり多くなくて、後ろ半分が全部、先生でした（笑）。自分たちだけで聴くつもりだったのだけど、ポスターを見て先生たちが聴きに来てくれたの。だから、藤田たきさんなどをお招きしたというのはやはり、少しは積極的になり始めていたのかもしれません。

――かなり積極的かと思います。

平形　そうですかね。大学で積極的になれたのはたぶん、高校のときのいろいろなことで慣れ始めたからです。本当に後半の一年ぐらいです。生徒会にも出て、生徒会の文化部のまとめ役をやりました。まとめ役をやる以上、知らないクラブがあっては申し訳ないって、いろいろなクラブを訪問して歩いたことがあります。その辺になると、少しは積極的になっていたのかもしれない。

立教女学院での生徒会活動

――立教学院には小中高の男子校があり、関係校として

女子校である立教女学院などが……。

平形　香蘭女学校。

――香蘭女学校とは、文化祭をやったりする際に横のつながりは……。

平形　なかったですね。

――学校間で一緒にイベントをやったり、聴きに来たり、訪問したりというのは……。

平形　あまりなかったですね。

――大学からもあまり人は来なかった。

平形　大学からもあまり来てないわね。むしろ来たのはあの地域の公立高校でした。あのころ生徒会連合をつくろうという動きがあって、呼び掛けがあって来たら、面白かったんです。学校が教室を貸してくれなかったの。そういうのを喜ばなくて。「じゃ、いいです」と言って校庭の芝生に集まりました（笑）。

――校舎ではやれないから。

平形　校舎を貸してくれないから、「どうぞ、どうぞ」といって校庭で集まりました。校庭には、音楽会ができる芝生の広いところがあったから、そこに座って交流したけれども、結局、それは実らなかった。今風に言えば、やはり学校が外へ出ることを嫌っていたのかもしれません。私たちはそんなことも知らずに、結局、「呼び掛けてくだされば参加します」ということで終わりました。

それが生徒会の一員であった頃の話です。好き放題やってきた話になっちゃいますね。おとなしかったはずですけど（笑）。高校の前半までは活発ではなかった。

（二）立教大学での経験

大学でのサークル活動（農村調査）

平形　大学に入ったとき、積極的になろうと決めたんです。高校での経験がちゃんと生きているのね。クラブを選ぶときにクラブに聞いて歩いたの、「何をやっていますか」と。本当に今、考えたら、何だろうと思うのだけど。史学科に入ったぐらいだから、歴史とか地理とか、そういう関係のところを聞いて歩くでしょ。そうすると、歴史学研究会は日本史の史料を読んでいると言っていたのね。史料だけではつまんないと思って。

それで昔の「山小屋」（学内木造校舎）の部室、ガタガタの、壊れそうな「山小屋」の二階に地理研の部室があって、そこへ行ったら農村調査をやっているというので、「あ、これは入らなくちゃ」と思って（笑）。それで入ったのが地理研でした。そのとき、最初は同学年の女性が一人だったかな。後から一人か二人入ったけれども、地理研が大学時代のすごく面白かったことです。

――女性部員が少なかった。

平形　少なかった。でも史学科には女性はいましたよ。経済学部などは一クラスに二人とか三人だったのではないかな。

――（立教大学地理学研究会会誌『さわぐるみ』を回覧）

平形　懐かしいなあ。ここ、行きました。

――山形県の高畠町。

平形　そうそう。

――そこが最初ですか。

平形　私が調査に行ったのはここが最初でした。もうこのときは、この調査の実施が決まっていたの。でも次の年になって分かったのは、どこへ行って何を調べるか、みんなが希望を出すんですよ。それをずっと討論していくの。私はどういう理由でここに行きたいとか、これを調べたいとか。だんだん絞られていって最後に二つぐらいの候補地が決戦投票になります。みんながどっちにしようかといった取り組みから参加できたのが二年目だったのです。だから、そういう討論がすごい面白かったの。

――会誌を開いていくと面白いのですが、「編集後記」もあって、最後にメンバーが載っています。

平形　ここに女の人、一年は他にいないの？　二年生はNさんとKさんという二人です。

――そうでしたか。

平形　三年生に一人、私の世代にはまだ次の人が入らないから私一人で、二年生の女性二人と私とがよく組んでいました。聞き取りに行くんですよ。その聞き取りがだいたい上級生と下級生と二人。電車で行って降りて、この農村を本当に一軒ずつ、ちゃんと聞き取りをしながら歩きました。

――それは地図をつくりながら行くのですね。

平形　聞き取りをやるのだけど、それがすごく面白いわけね。一日に何軒もできない。帰ってくるとそれを整理するんですよ。夜のミーティングで報告するわけ。

――当時は筆記でとるしかないですものね。

平形　そうそう。

――大きいテープレコーダーを持っていくことはありましたか。

平形　それもありませんでした。全部手書きで記録をとりました。この町をどう見るかって。ちょうど果物が栽培され始めたときです。ブドウとか洋ナシとか、本当に初歩的なものでした。それまでは山村と田んぼの町。今はもう全然違うと思うけど、本当にここに調査に入ってよかったと私は思いました。

――次の年の調査地が岩手県ですね。

平形　そう。そのときに上の学年から、どうしてそこに行きたいかという話があったんです。

――開拓農業という興味深いテーマを選んでいますね。

平形　そう、ここは「満洲」(以下、括弧をトル）帰りの人びとが開拓した場所で、岩手県旧岩手郡滝沢村（現・滝沢市）上郷（長野県旧下伊那郡上郷村から戦後、開拓された分村の総称）というところでした。ここは、長野の上郷の人が満洲から引き揚げてきてここへ入ったと覚えています。

――分村移民で満洲に行っていて、その引き揚げた人たちが入ってきた。

平形　何しろ、「すぐ隣だよ」と言われて歩き出すと、二〇分ぐらい行かないと次の家が出てこないの（笑）。ここの地理的特徴は広い牧草地や酪農でした。この調査もすごく面白かったですね。

　この冬の予備調査から現地に行ったんです、次の年度の四月に始めるために。ともかく予備調査に行ったのは、真冬の雪が降っているときでした。小岩井農場があって、その途中のところに調査村があります。雪にふぶかれてねえ（笑）。ろくな装備をしていかなかったから大変でした。予備調査が一番大変。夏にもやはり盛岡のお寺に泊まり、一週間ぐらい毎日毎日通って、話を聞いてまとめました。

――では調査は一〇日間ぐらい。移動日が一日ずつで、合計で七日、八日間ぐらいかけて調査を実施なさった。

平形　そうですね。一〇日間はなかったと思います。夜行でいくから七～八日間。だから、行くとワーッと、一生懸命、一生懸命に聞くわけです。

　予備調査のときに岩手大学の先生のお宅へ話を聞きに行ったら、真冬の和室で、ものすごく寒かったの（笑）。そんな記憶があるけど、でもその先生は「よく来た」といってとても大事に対応してくださいました。

　もう一つの楽しみは、調査が終わると上の学年の女の人二人と一緒に、この年は北海道を巡ったかな。いわゆる学生旅行に行きました。ユースホステルに泊まって、朝ごはんが出たら全部おにぎりにして、持って行っちゃう（笑）。今、やらないでしょう。何しろ食料は貴重だから、缶詰は自分で持って行く。海苔も自分で持って行く。でも、ごはんはみんなもらってきちゃう（笑）。そういう旅をまた、この続きにするんです。それから帰ってきて、お金ないからアルバイトを一カ月するの。

――調査にはどなたと一緒でしたか。

平形　長野から来ているMさんがサークルに入って同学年の女性は二人になったんです。

――長距離の移動をともなう調査はたいへんでしたね。

平形　でもねえ、面白いから平気だったの（笑）。

――大丈夫ですか。

平形　大丈夫だったと思いますね。行くのも今風じゃないんですよ。夜行列車で行くんです。そうすると、着い

たときから動き出せる。その日も一日、やるんです。

――体力が……。

平形　まだまだありすぎるぐらいあった時代です。

――次の調査地が知多半島ですね。

平形　そう。この調査のときが三年生で、ちょうど私たちの三年生がリーダーシップをとって調査を実施しました。知多半島にちょうど、愛知用水が開かれるときでした。これでこの地域が、どう変わるか変わらないか。やはりこの調査でもお寺に泊まって、地域をずっと歩きました。

――〔地図を示しながら〕こんなに長距離を歩いたのですか。

平形　全部を歩いたのではなく、この期間中に駅に降りて聞いて、駅に降りて聞いてを繰り返しました。予備調査のときに篠島へ遊びに行くとか、楽しみと調査が半分ずつでした（笑）。何しろとっても楽しかったですよ、これが。

――ちょうど三年生のときに、主体的に計画、実行を実施なさった。

平形　だから、そこのテーマへ行くまでは全員が議論に参加して、だんだん絞られてくるわけです。これは三つともすごく面白かった調査です。みんな農村調査です。

――予備調査をされるのは、決まってから行くのか、それとも最後の候補が絞られる……。

平形　ほぼ決まって、絞ってから予備調査を実施しました。

――決まった後ですね。

平形　最終的には、本調査前に資料調査を全部してくるわけです。予備調査に行ったところでいろいろな資料をもらってきます。それから、お寺も頼んだりして、夏に来る準備をしてくる。

――今回の調査では、二回予備調査をしていますね。第一回予備調査のデータをもとにした研究会を恐らく四月にしていますね。

平形　そこ〔資料にある土地は〕はずっと行ったところです。

――阿久比町、半田市、武豊町、常滑市、美浜町、内海ですかね。

平形　そう。その辺をよく歩きましたよ。

――第二回予備調査は六月一八日から二二日とあります。

平形　それは最後のお寺の詰めとか、みんなやってきています。一回目のほうが面白いですね。知らない土地へとっとこ、とっとこ入って行って、聞き取りをしていろいろ教えてもらいました。私が四年生のときに水島コンビナートへいきました。また、卒業してからも調査に行きましたよ。夏休みに弓浜半島へ行きました。

――顧問の中田〔栄一〕先生というのは、あまりこうい

う調査には随行なさらなかった。

平形　そう、世話になったけど。教師よりも学生のほうに調査の主導権がありました。

――そういう運営だったのですね。では、最後の調査についてうかがいます。

平形　この調査は、水島のコンビナートができるときです。これは四年生になっても行きました。

――さらに調査に二回行っていますね。

平形　そう。卒業してから夏休みがあるでしょう、教師になったから。全行程は行かないけど。

――もちろん。OBとしてお名前が載っています。

平形　行きました。

――それぞれの調査にお名前が資料に記載されています。

平形　一つは日本海側の弓浜半島。もう一つが新潟の農村で、お米をつくっているところです。たぶんこのとき、木崎村小作争議の話が調査の途中で聞けて面白かったんですよ。一九二〇年代当時のことをうかがいました。地理研では、具体的なテーマで、調査の方法を楽しく体験したという記憶があります。

日米安保条約の改定反対運動と国会デモへの参加

平形　〔大学にいるときに〕日米安全保障条約の話が出るわけよね。二年生のときが「六〇年安保」です。今の学生より私、もしかしたら真面目だったかと思います。安保のことはこのクラブの中でも話し合い、最終的に「じゃ行こう」といって国会のデモに参加しました。想像できないでしょうけど、ここから出たデモが池袋の駅のほうまでずっと続いていました。

――大学から駅まで。

平形　デモ隊の列は駅まで続くぐらいの長さでした。そんなにはいなかったと思うけど、そう思うくらいの雰囲気でした。ゼネストで街の商店が閉まっていて、教室に訴えに来る人たちもいるわけでしょ。訴えに来る人たちもいるのだけども、むしろクラブでちゃんと資料を読んで話し合って、「やっぱりおかしいね」になり、「やっぱり行こう」になった。何があるか分からないから大事なものは置いて行けとか、デモ行進をする場合は男性が外側で中に女性が入れとか、絶対離れるなとか、そんなことを言われながら参加しました。親にずいぶん心配をさせました。家へ帰って、今度は夜中にやっている中継をラジオで聴くとか。だから、安保条約改訂の反対運動の中心ではなく、普通の学生が話し合って真面目に参加したのです。

――立教大学の池袋キャンパスの山小屋にあった部室の中でそういう議論をしたり、ラジオを聴いたりなさっていた。

平形　そう。狭い部室、一四～一五人でいっぱいになるようなところでそういう話をしていました。今、しますか？　学生は政治の問題を。

――中にはする人も……。

平形　議論をする人もいる。

――私〔奈須〕が教職課程で関わっている社会・地歴科教員を目指している学生の中には、政治のあり方への関心を持って議論をしている人たちも確かにいます。

平形　「普通」の部ですか。

――「普通」はなかなかいないのではないでしょうか。

平形　「普通」の部の中で討論して、行動まで行くのは、当時は当たり前だったけど、いま考えると、その後、教師をしていますから、「いや、あれは結構ちゃんと真面目に世の中を考えていたんだな」なんて思うんですけどね。

――サークルを超えてそういう議論をしたりするのですか。

平形　サークルを超えては教室での議論ですよね。教室ではそれほど討論していないと思いますね。

立教大学文学部史学科の想い出（女子学生の割合）

――〔女子学生が予想よりも多く掲載された卒業アルバムの写真を見ながら〕女子学生の数が多いと思うのですが。

平形　それはその通りです。私もこれを見てびっくりしました（笑）。

――西洋史のゼミに女性が多かったようですね。

平形　フランス史の井上幸治先生がいらっしゃいました。フランス革命の研究で著名な方で、秩父事件の研究にもたずさわっていらした。

――やはりゼミ生に女性が多いですね。

平形　圧倒的に女性が多いですよ。

ここの中には女学院から立教大学に行った人が何人もいます。〔卒業アルバムを〕見ていて分かります。

日本史のほうは、男性の学生は少しだけが多く在籍していた。西洋史のほうは女性が多かったと思います。わたしはクラブの調査などに行っていましたし。

――今でも史学科は、文学部の中でも相対的に男子学生がやや多いというか、ほかの学科が、圧倒的に女子学生が多くなっています。でもこれを拝見して、この時点でこんなに女性がいらっしゃったのだというのを再認識しました。

――フランス史やアメリカ史にたくさんいらっしゃいましたね。

立教大学でのゼミナール、井上幸治先生と卒業論文

平形　井上〔幸治〕先生はフランス史なんですね。松浦〔高嶺〕先生がイギリス史。それから清水〔博〕先生がアメリカ史でしょ。あと有賀〔貞〕先生もアメリカ史で

したね。

それぞれの教員はいるのだけど、ある地域の研究者がいないのですが、何だと思います？

――何でしょうか

平形　ドイツ史がいないんです。

――確かにそうですね。

平形　私はドイツに興味があったわけ、どうしても。

――卒論もドイツのアルトバイエルンの歴史でしたね。

平形　あれは井上先生が貸してくださった本がきっかけなのだけどね。どうしようといって相談に行ったのが井上先生のところだったんです。概論が終わったり、西洋史特講が終わったりして、卒論を書く段になった。三年生の初めです。「演習を取るところないのだけど、どうしましょうか」と相談したの。そうしたらこの先生が、「俺のところに登録しておけ」と（笑）。

――井上先生が。

平形　井上先生がそうおっしゃいました。フランス語のできない、フランス史をやらない学生がゼミに二人いたんです。もう一人いるのですが、「僕のところに登録しておけばいいよ。昼休みに研究室に来い」と言われたんです。「自分ができないときは大学院生に頼む」と。だから、そういうこともあったんですよ、私には。

――でも、ちゃんと面倒みてくださっていますね。

平形　ええ、ちゃんと世話してくださった。だから、たぶんこの先生の演習二年間、卒論とだから四単位かな？しっかりいい成績をもらいました（笑）。だけれどもこの先生の演習の授業に一度も出ていないの。

――「フランス絶対主義の危機」という西洋史特講は特に受けてはいなかった。

平形　いや、特講というのは授業だから。それはみんな受けているの。ただ、演習というゼミですよね。

それは二年間ともちゃんと登録はしたんですよ。たぶん一度も行っていないですよね（笑）。行ったのは研究室。昼休みに。たぶん曜日も決めていたと思う。曜日も決めて、自分が忙しくて見れないときは、大学院生の方が私たちの相手をしてくださったと思う。そういうこと、ありでしょうかね。あったんですよ（笑）。

もう一人はルターをテーマとしていたと思います。テーマは二人とも違うわけね。私は、「ドイツの農村がどうしてあんなふうな歴史になっちゃっていくのかという考えから、どうしても農村をやりたい」と言ったら、「これを読んでみるか」とドイツ語の読めない本を渡してくれたり、それから、「この先生のところに行ってこい」といって紹介をしてくださったりしました。國學院でドイツ史の共同体を研究している先生でした。その先生に紹介状を書いてくれて、私がまた手紙を出して了解

を取り、先生のお宅へ行きました。どこかの団地だった記憶があります。それでいろいろな論文の抜刷をくださったり、貸してくださったりして。そういう勉強のツテもつくってくださいました。

――井上先生を介して。

平形　そうです。だから、私が一番お世話になったのが井上先生だと思います。井上先生は秩父事件にずっと取組んでおられ、大きな資料集を出されていますよね。卒業してからか、卒業する前か覚えていないけど、浦和だったかな、井上先生のお宅をお訪ねして、秩父事件の話も聞いたことがあるし、最後は浦和でのお葬式まで参列しました。一番思い出もあり、お世話にもなった先生が井上先生です。

皆さんにはナポレオンとかフランス史で有名だけど、私にとってはそういう独特の、気骨ある先生でした。小柄な方でしたけど。今でも会えるものなら会いたいと思います。だから、教職も取ったし、クラブもごちゃごちゃいろいろなことをやっていたし、昼休みにはこの先生のところに行ったり。

立教大学での住谷一彦先生との出会い

平形　もう一つは、今度はひとつも関係ないところに、単位は一つももらわないで二年間、行ったところがあります。それは経済学部のゼミ。三年になるときにやはり幾つも経済学部の授業を聴きに行きたいのね。時間割と照らし合わせて、履修要項でマルを付けました。私は農村経済の講義などに行きたかったの。でも、講義の隙間で取るでしょ。だから、先生がだめと言う場合と、私の授業の空きが合わない場合がありました。

――松田先生の講義でしたか。

平形　「経済史」の授業も聴きに行きました。

――ゼミナール形式のものも参加なさいましたか。

平形　はい、ゼミナール形式ですと、住谷一彦先生のゼミに参加しました。住谷先生は、松田智雄先生の後の時間でした。松田先生のところには、立教女学院時代に行ったことがあります。話が前後するけど、立教女学院の寮が軽井沢にあって、その地域を調べるときに女学院の先生が松田先生をご存じでした。軽井沢のこの地域の何を調べたかは失念しましたが、「松田先生のところがいい」と言って、生徒を二人連れて訪ねて行ってくれたのね。それで松田先生の家でいろいろな話を聞きました。大学に入ったら松田先生の授業があって、それも頼みに行って聴かせてもらった。大学院の授業だったと思う。

――大学院の授業に出てらっしゃったのですか。

平形　そう。だから、訪ねて行って「先生のこの授業を聴きに行ってもいいですか」と言うと、先生たちはいや

がらずに「いいよ」って言ってくれるのね。それで何回か講義を聴かせてもらいに行きました。「経済史」だったかなあ。顔は覚えているのだけど。もう一つ、私が聴きたかったのが「社会思想史」なんです。「この授業の聴講、いいですか」と言ったら、住谷先生が気軽に「ああ、いいよ」といって聴かせてくれたのね。もう一つ言ったのは、「ゼミに行ってもいいですか」（笑）。

――それがマックス・ウェーバーの研究を扱った講義ですか。

平形　住谷先生の授業の「社会思想史」は面白かったので、単位をもらわずに二年間ばっちり、全部授業を聴きました（笑）。

――ここの年だけ松田先生がどうやら講師をして、住谷先生が在外研究で海外に行っていたと伺いました。

平形　そう。住谷先生はオーストリアのウィーンに行っておられました。ゼミではその話がよく出ました。

私が三年、四年の時の話です。二年生のときは行っていません。だから、三年、四年のときは住谷先生の授業は二年連続で受けました。たぶん欠席ゼロに近くだったと思います。それから、住谷先生のゼミはタッカーホールの五階だったかにあった小さな部屋で週に一回。何曜日だったのかしら、二時ぐらいに始まって、終わるのが六時、七時になりました。時として、それから虎ノ門のビアホールに行くの。

――虎ノ門まで繰り出すのですね。

平形　もちろん全部は行かないと思うけど、付いて行ったことが何回かあります。そのときにウィーンの話がいっぱい出ました。このときのゼミに、女性がやはり二人だと思います。私を入れて三人。三年生でも六～七人の男性とで一〇人ちょっと。あと四年生の人が数人いました。前年度から履修している人です。ちょうど一四人ほどいて、私は本の読み方を住谷先生に教えてもらいました。

ゼミでは、エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』を逐一、読んでいくの。だから、前の日に図書館にみんないると言ったのは、逐一読んでいくためには言葉の意味を全部調べないといけないからです。一回二〇ページほどの講読ですが、文脈や文意をどう理解するかとか、自分なりに取り組んでいかないと怖くてゼミに行かれない。本の読み方は井上先生ではなくて、この先生に教わったように思います。

――原書を読んでいくわけですか。

平形　ううん、日本語の翻訳書です。しかも、やさしいはずの「岩波新書」みたいなものを読んでいくときに、ばっちり読み方を教わりました。

ゼミの旅行にも参加しましたね。尾瀬と京都に、二年

間とも行きました。卒業しても同窓生扱いをしてもらっています。

――今もお付き合いがあるのですね。

平形　あまり頻繁にはないけれども、ゼミのOGとして登録されているのか、催し物があるときにはちゃんと案内状が来ますから、住谷ゼミでは誰も私が文学部だとは思っていない（笑）。

――不思議ですね。

平形　でも本当によく受け入れてくださいました。全く差別も何にもありませんでした。たぶん「社会思想史」の試験も受けたと思います。

――単位は取れないけど試験は受けられたのですか。

平形　そう。単位は要らない。もらう気はさらさらなかったから。

――確かに、試験のときだけいないというのはまずいですね。

平形　ねえ（笑）。もっとひどいのは、クラブで書くのに慣れているから講義ノートをとるでしょう。それをもとにして講義録をつくっていました。「貸して」と言うから貸した記憶があるし、出来上がったものを見せてもらったこともあります。だから、今考えると、まさに高校のときに少し自由があった中から得たものを、大学の四年間では私なりにフルに活用したのではないかなと思います。

立教大学アジア地域研究所所蔵の外邦図とその整理

平形　あとは別技篤彦先生という東南アジアの地理学をご専門とする方がいらっしゃいましたが、今でも戦前の地図はありますか。

――はい、立教大学アジア地域研究所〔当時は、立教大学アジア地域総合研究施設〕が資料（外邦図）を所蔵しています。

平形　インドネシアなどの地図がありました。日本の軍隊がつくった。

――そうですね。

平形　地図資料が引き出しにこんなにあった。私が、少しそれを整理しました。空いた時間に行って、見せてもらいながらね。

――かなり貴重なお話だと思います。

平形　そうですか。

――全国でもたぶん、ここにしかない資料があるかと存じます。

平形　「これはめったにないんだぞ」と言われて見せてもらいながら。それを別技篤彦先生の部屋で手伝った記憶があります。別技先生は地理学をご専門としていたから地理研の顧問でしたし、気軽に行っていた記憶があり

ます。面白い先生でした。

大学でのゼミ選択

――大変興味深くお話を伺いました。平形さんが大学三年生になったときに、たとえば、経済学部の住谷〔一彦〕先生のゼミに出てみようとお考えになったように、松田〔智雄〕先生のことは高校生時代からご存じだったのでしょうか。

平形　本当に立教女学院時代にちょっと知っているだけよ、お名前とお顔を。

――はい。このテーマでこういう講義やゼミに出てみたいと思われて、実際に履修要項なども自分の文学部の時間割とを見比べて決められたというのはやはり、地理研でのつながりがあったのでしょうか。史学科に学ぶ中で、そのゼミに行きたいと思うきっかけがあったのか。その大学での最初の出会いをお聞かせください。

平形　大学に入学するときに学科の希望を出しますよね。そのとき、第一希望が史学科で、第二希望が経済学部の経済学科でした。だから、高校のときの希望に、社会科系統ならできることを何かやりたいと思っていたので、文学部史学科の選択になった。それから、地理研で農村経済とか、地域調査とか、そういうのが面白くなっていたから、両方だと思います。

何か聞きに行きたい、何かしら知りたいということがありました。地理研には経済学部の人がいるでしょう。だから、その人から履修要項を借りて、私のほうの授業の空いている時間に何か面白い授業はないかなと探しました。そうやって授業を見つけては、その先生の研究室まで行って、「聴講させてくださいますか」とお願いしました。「だめ」と言った先生もいたと思います。「いっぱいだから」とか、「経済学部ではないから」とか。「社会思想史」は聴講して面白かったですね。でも、やりたいことをこうやって行ってやるのが好きだったのかな（笑）。

――切り開いていかれて。

平形　行ってみたら先生たちは話も聞いてくれるし、希望を言えば聞いてくれるし、相談にも乗ってくれるということが分かったから、私にはうれしかったですね。

飯塚浩二先生の講義

――付随して二つ伺います。一つはたとえば、文学部の当時の履修要項を見ていたら、経済学部ではなくて、文学部に飯塚浩二先生の授業がありますよね。

平形　ありました。

――飯塚浩二先生は戦時末期までは経済学部にいらしたと思うのですが、平形さんは飯塚先生の授業を履修なさいましたか。

平形　聴きました。あと本をよく読みました、飯塚先生の著作です。

――やはり一九五〇年代に出た、重要な著作（『日本の精神風土』（岩波書店、一九五二年）、『アジアのなかの日本』（中央公論社、一九六〇年）など多数）をお読みになりましたか。

平形　そうです。面白かったです、あの方の著作は。

――でも、当時は講師としていらしていた。

平形　そうです。在学中に私、聴きに行った記憶があります。たぶん飯塚先生の講義は取っていたのではないかな（後日、夏休みのレポートで、TVA（テネシー川総合開発計画）ではなく、DVA（インドのダモダール川総合開発）について書いた記憶があるとのこと）。

教職課程

――大学ではクラブ活動をしながら勉学に励まれていたと存じますが、在学中に教職課程を履修なさっていますね。

平形　履修していました。それはその後の何かをしていくときにも、教員免許は絶対に取っておいたほうが得という考えがあったからです。

――大学に入るときにある程度、教員免許を取ろうと考えていましたか。

平形　教員免許は取ろうとしました。でも教師になろうとは全く思っていなかった。

――資格として教員免許の取得を目指された。

平形　ええ。「資格は取ったほうがいい。生活をしていくのには」という。立教女学院の出身者のなかでは、あまりそういう考えの人は多くなかったです。でも私は取りました。

――高校生のころから取ろうと考えていらっしゃいましたか。

平形　大学のときです。資格として持つということはずっと考えていたけど、教師になる気はなかった。四年生まではね（笑）。なる気になったのは、やはり井上先生の影響なんですよ。

井上先生は、「史学概論」をずっと担当なさっていたり、フランス史の講義を担当なさっていたりしました。先生がよく言っていたのは、日本人は勉強をしない、ないしは研究をしないと言って、「フランスのリセ（高校）の教員は研究者だ。しっかり勉強している。日本の〔高校の教員〕は教えることだけで自分の研究をしない」。私は勉強をしていきたいと思っていたから、すごく印象に残っている言葉です。「教師になっても研究していくのは当たり前だ」と何回も端々に言っていた。要するに、フランスの歴史をしゃべったり教育論をしゃべったりするたびに、そういう言葉が出てくる。私はすごくこ

の先生のおかげだと思っています。

教職課程と「道徳教育の研究」

――今でもだいたいそうですが、とりわけ社会科の免許は文学部だけでは取り終えられなくて、法学部、経済学部や社会学部で開講している授業を単位としては取っておかないといけない。

平形　はい、取りますよね。

――たとえば、そういった授業は、正直、あまり関心が向かなかったけれども、とりあえず取ったのか。他学部の授業で、何か印象に残ったものがあればご教示願えるでしょうか。

平形　教職で一番印象にあるのは、「道徳教育の研究」でした。この名称の講義が始まった年だったんです。

――まさに。

平形　必修でした。それで仕方なく聴いたの（笑）。授業では、哲学の先生がご自分の専門の哲学の話をずっとしていたの。「道徳教育の研究って、まあ大したことないのだな」と思いました（笑）。今、そんなことを言ったら怒られるわね。

――いやいや（笑）。

平形　道徳を教えるのは大変だから。いま、私は小中学校の道徳の教科書の問題に一生懸命取り組んでいます。当時、大学で「道徳教育の研究」という授業を受けたけれども、現在、こんなふうになるとは全く思わなかった。「道徳」が初めて入って、大学の教職課程で教員免許状を取るにはこれを履修しなくてはいけなくなった。

――そうですね。一九五八年に特設「道徳」が突然、組み込まれました。

平形　そうでしたね。それが一つ、記憶があります。もう一つは、「青年心理学」が午後四時から始まるの。五時間目かな？

――五時間目ですかね。

平形　夕方、暗くなるころから授業が始まるの（笑）。

――「道徳教育の研究」は必修単位でしたね。

平形　だから、そういうのも全部取ったけども、記憶にあるのは、その「青年心理学」が暗くなって始まって、ほかに行きたいのに、必修だから絶対聴かなくちゃいけないということでした（笑）。

――当時は、「教育心理学」、または「児童心理学」が開講されていました。

平形　「青年心理学」のほうを取っていたの。

――「青年心理学」ですね。以前は必修でした。

平形　そう。だから、必修は全部ちゃんと取りました。あと、印象に残っている講義に糟谷伊佐久先生の「人類学」がありました。これは面白かったです。また、「地

学」がありましたね。だから、その中でもできるだけ面白そうなものを取りました。

――教科に関する授業を履修なさった。

平形　教科と少しは関係があるとか、行けば面白いのではないかと思うところとかを選択しました。

――たとえば、「人文地理」とか、「歴史」とかはいかがでしょうか。

平形　こういうのは史学科のほうで取れるでしょう。仕方がなく行った科目もあって（笑）。五〇年前のことを思い出すだけでも大変です。

――そうですよね。

平形　でも歴史のほうは全部取れるので取っていると思ったんです。ダブったりダブらなかったりして。半田元夫先生の「教科教育法」も取りました。半田先生はギリシャ史がご専攻だったかな

――ギリシャ・ローマ史やキリスト教史がご専門でした。

平形　そういうのですね。それから、地理は別技先生の授業を取ったでしょう。だから、この中ではたぶん、余分でもできるだけ取っていたと思います。時数ギリギリではなく、ちゃんと履修していたと思うんだけどな。

――当時から正規の科目の時間帯が日中にあり、課程科目がその後にあります。夕方に課程科目が多く設置されているのは今も同じですね。

平形　いや、日中に開講していた授業もありましたが、それは絶対その時間ではないと履修できなかったんです。心理学のところで開講していた授業もありましたよね。そういうところに行けば取れるのだけど、私の所属学部・学科の関係でそれらは取れなかった。面白そうなものを選んで履修しましたが、たとえば、「地学」の演習では三浦半島を一周した記憶があります（笑）。

――すごい距離ですよ。

平形　三回に分けて地質調査を実施しました。三浦半島の外周全部かどうかは分からないけど、今回はこの辺、この辺という感じで出かけました。

――葉山あたりを起点になさったのでしょうか。

平形　「地学」の先生の授業が面白かったけれども、たぶん教職課程の「地学」は演習ではないかしら。史学科にはそのような授業はなかったと思うから。

――学芸員課程の授業、たとえば、「博物館学」は取られなかった。

平形　取らなかった。教職課程の授業の中で、できるだけ面白そうなものを選んだのだろうと思いますね。

教育実習の体験

平形　教育実習先は杉並区内の中学校だったかな。区立中学に行きました。

――立教女学院ではなかった。

平形　立教女学院ではありませんでした。「学校で紹介してくれるところに行く」にマルを付けて、実習先を決めました。

――今はなかなか自前では探せないようです。

平形　自分で探してくる。そうすると、出身校へ行くことが多い。でも、私はそういうのを断ったことがあるから。

――立教女学院出身の学生は基本的に出身校に行きなさいという不文律があったのかもしれません。

平形　そうですか。私は実習先として立教女学院に行く気がなくて、「学校で紹介してくれるところに行きます」というところにマルを付けたらその学校でした。同校は部分的に、生活保護家庭の生徒や「施設」の生徒が案外、多いんですよ。担任に付いた先生から「十分注意してやれ」と言われました。そういう子たちと触れ合ったりもできたし、「地理」と「歴史」の授業を担当させてくれたのかな。指導していただいた教科担任は、「勝手にやってください」、「自由にやってください」という面白い方でした。「地理」の担当だった中田先生が見にきてくれたから、そのときはたぶん、「地理」を担当していたのだろうと思います。先生方が各実習先に巡回してきますよね。

　そのときには中田先生が来てくださった記憶があります。聞かれると思い出すのですね（笑）。中学校を教えるのも面白かったですよ。

――実習は何月頃に実施するのでしょうか。

平形　六月が中心です。授業を休んで実習に二週間、行きました。

――二週間でしたか。当時は二週間で、今は異なりますね。

平形　違うの？

――中・高両方の教員免許を取得しようとする場合は、三週間の実習期間が必要です。

平形　そうなの？

――これは二〇〇〇年度の改定で変更しました。

平形　大変よね。学生は卒論を書いている時期でしょう。

――はい、三週間かかります。

平形　そう。二週間のときでよかったわ（笑）。実習期間は、教育実習に集中しますよね。というか、せざるをえないでしょ。先生も生徒も全く知らないところへ行ってねえ。あれもやはり勝負ですよね。「絶対、絶対やらなくちゃ」という。授業をつくるのはもう必死ですよね。比較的自由な先生ならばいいけど。でも一応、授業案をつくって伺うこともありました。また、その先生がカメラを持って、時々、のぞきに来るの（笑）。

　だから学校の中では「アウトサイダー」な感じの先生であったけれども、私たち実習生にはとってもよくして

くださいました。文句なんか言わずに、「やったらいい」、「良い」とか「悪い」とかいろいろ言ってくれました。

――その教育実習では、立教からたとえば、二～三人一緒に行く場合があるのですか。

平形　他の学校も含め、実習生は一〇人ぐらいいました。立教の人も私一人ではなくて数人いて、他の学校からも来ていました。みんな違う先生に付くから、お互いにあまり交流はなかった。「地理」と「歴史」を担当したのですが、一年生と二年生のクラスだったと記憶しています。

同校では前述したとおり、「施設」の子がコソッと寄ってきます。担当で付いた先生は「教師になる気あるか」と聞いて、私はたぶん「ある」と言ったのですね。そうしたら生徒の、いわゆる「状況」を書いてある紙を見せてくれました。

――名前などの個人情報ですね。

平形　はい、名前や各家庭の事情が全部書いてあるクラスの紙があるじゃない？「教師になる気がある」と返事したときに、初めて見せてくれました。だから、私は「これは確かだな」と思って。「なまじやる気ない学生には見せる気はない。やる気があるなら、こういう生徒たちだということを分かってやれ」と言ってくれたので、その状況を本当に一生懸命見てやりました。

普通の家庭の子もいれば、「施設」や経済的に厳しい子もいる。事情が複雑なのは、主に「施設」の子たちですね。それも一生懸命覚えました。その二週間はもうそれしか考えないで、一生懸命やりました。実習を終えると、社会に戻ってきたような気持ちになりました（笑）。教育実習もいい人生経験ですよね。

――やはり教育実習に本気であるかどうかをその先生はすごく……。

平形　それは後々、仕事で授業を担当するようになってからも大事ではないのかしら。生徒のことをちゃんと、大事に考えるというのが教職の経験の第一歩なのだということを身につけました。準備が不十分な教育実習生でもね（笑）。

――絶対に押さえなくてはいけないところは外さない。

平形　担任で付いた先生が「状況」を書いてある紙を見せてくれた先生で、教科で付いた先生が「自由にやれ」と言ってくれた先生です。それぞれタイプが違いました。でも、どちらの先生も感じがよかった。両先生に二週間付いたのは、良い経験になったのではないかと思っています。友達の中では、教育実習に行った先で恵まれない人もいたみたいですが。

――いろいろなことを経験なさいましたね。

平形　帰ってきて話すと、「よかったね」と言ってもら

えたからね。

――いま教育実習のご経験を伺って、初任の私立校のときの、「生徒たちを守らなきゃいけない」というお話に良くつながっていくエピソード（後出一一七頁下段から一一八頁上段）と思いました。

平形　そうですよね。

――もちろん、いろいろな根っこを平形さんはお持ちになっているけれども、先ほどの教育実習の話は一つの原体験として挙げられると思います。

平形　よかったですよ。先生は、教職を担当なさっていらっしゃるのですか？

――はい。いま私〔奈須〕は教職課程の教員です。私はもともと「教育史」が専門ですが、「社会科・地理歴史科教育法」の授業を担当しています。

平形　そうですか。

（三）卒業後の経験

教員として就職

――〔平形さんは〕手に職を付けようと考えていらっしゃったのですか。

平形　やっぱり自立したかったのでしょうね。あとは弟が一人いて、私と七つぐらい空いているのかな。大学進学もあるし、中高も私立に行っていた。それと私が卒業する直後に父が定年になることが分かっていたから、大学院には行きたいけど行けないというのは自分で決めていました。それで仕事を探したら議員の秘書というのがあって、「そんなのはいやだ」と言ってね。

――いやなのは蹴ったのですね（笑）。

平形　そう。それで行ったのが柏市の私立高校です。まだできたばかりの高校に面接しに行ったら即決してくれたの。「どうぞ、どうぞ」というので入って、そこで世界史の教師を三年間、勤めました。

でも、軍人上がりの校長さんで、徹底的な昔気質の男女別学教育です（笑）。同じ学校でも女子部と男子部とがあって、私は女子のクラスの担任で、授業は両方を担当していました。ただ、あまりにも待遇がひどいから（「裏」で）組合づくりが始まっていました。組合づくりしていたところに入ったわけだから、もちろん声を掛けられて組合づくりに参加したのね。そうしたら、親を呼び出して「引き取れ」と言ったらしいの。

でも私の父は非常に保守的な人なのだけども、気骨はあったみたいで、「あんたにそんなことを言われる筋合いはない」と断って、引き取らなかったんです（笑）。それはずっと後になって父から聞きました。「へえー、そんなことあったの」と言ったら、「ひどい校長だった」

と言って（笑）。そんなこともあったのですね。

だから、いつも「教師になったのはなぜ？」と言われるのですけど、たまたまです。

――そうですね。今、お話を伺ったかぎりですが、井上先生の影響が強くあったように感じました。

平形　あります。教職に就くのもいいなと思ったのは、教師になったら必ず勉強を続けようと考えていたこともあったと思います。それなりにやってきたつもりです。

歴史教育者協議会での取り組み

平形　あとは職場に入った次の年かな、学校の職員寮に立教の一年先輩の方がいて、その人に誘われて一緒に歴教協（歴史教育者協議会）に行くようになりました。教師になって二年目の夏に、伊香保で第一六回大会（一九六四年八月）がありました。それはもう別の機会にお話ししたことですね。

――〔宮川〕『地域に学ぶ関東大震災』（日本経済評論社）を出版する際に聞かせていただきました。

平形　そうですね。私立の学校というのは、教師をしていても勉強するチャンスが少ないの。だけど夏に〔歴史教育者協議会の〕大会に行くと、初心者の私には空中戦に聞こえるような難しいことをいっぱいいっぱい話しているわけです。特に世界史関係の吉田悟郎さんや鈴木亮さんなど、全国からたくさん集まって議論をやるわけです。世界史はそうなりますよね、日本史の地域ではないから、議論が先行する傾向がありました。それを一生懸命聴いていて書名をメモ書きしてきて、自宅に帰ってから自分で一生懸命勉強しました。だから、申し訳ないような勉強の仕方をして、経験も少ないのに生徒に教えました（笑）。

教育現場での実践と組合活動

平形　でも、このとき三年間、同じクラスを持ちました。商業科の生徒四九人かな。いまでもクラス会が続いているんですよ。卒業しても毎年毎年、連絡があります。今週も日曜日に出掛けます。私の体調をうんと気にしながらね。いま幾つかしら。新入生の教員と一年生だから、二二歳と一五歳で私と七つしか違わない。

そこでもやりたい放題よね。おっかない軍人上がりの校長さんが威張るでしょ。生徒のことを守ろうとすると、やはり何か言わなくちゃならないわけ、あの辺りで組合が強いある公立中学校があったの。その中学校出身の生徒が私のクラスに三人ぐらいいたのね、ところが、その中学校が「学テ闘争[1]」をやったものだから、体育館の舞台の上から「その中学の生徒、立て！」と言って攻撃するんです。もう冗談じゃない。

絶対許し難いでしょう。やはり自分の生徒を守らなければいけないから、新人でおっかなくたって何か言わなくちゃならない。だから職員会議で発言するわけ（笑）。おとなしくない教師になる。それは生徒に鍛えられたというのか、校長に鍛えられたというのか。私が辞めてから同校は組合をつくりました。非公然ではずっと組合準備に参加していました。東京に行って、週末に組合の相談をするの。非公然て分かります？

――はい。

平形　組合が「ない」ことになっている、組合のことです。それはわたしが就職して三年目ぐらいの時だから、みんな私より上の年齢の方たちがやっていたのに、私は付いていっていました。いろいろ面白かったことがいっぱいあります。だんだんずうずうしくなってきますよね（笑）。生徒を守るというのは、やはり鍛えられますよ。

私が受け持ったのは四期生だから、まだ本当にできたばかりの学校でした。就職する生徒が多い学校で、就職の売り込みに校長が車に乗せて生徒を連れて行ってくれます。生徒一人ひとりに手書きで推薦状を書きます。だけど、その原稿の材料は全部担任が書くの。資料を全部集めて、推薦したほうがいい内容も書きます。それをいかにも自分が書いたように、適当に文章を書く。でも校長が自筆で生徒の推薦状を書けば、世の中に認められるから。それで生徒も連れて売り込みに行く。

――なかなか……。

平形　軍人上がりの校長でしたけど、そういうのでも鍛えられますよね。生徒たちを守りながら、生徒たちにはなんとか自由にさせたい。今とは違ってもっと田舎で、周りは林でしたから、テントを張ったら十分夏のキャンプができます。近くに手賀沼があって、手賀沼まで散歩に行ったりしました。だから、「子どもたちと何かやろう」、「よし、やろう」ということになると、校長さんに交渉しに行きます。学校のお金を出してテントを買ってもらい、夏休みに校庭にテントを張ってクラスの生徒とキャンプをやりました。

――その高校で働いていたころは通うには距離がありましたね。

平形　通わない。校舎の近くの職員寮にいました。東京に帰ってくるのは一週間に一回だけでした。それでその帰ってくる途中か次の日かに組合づくりの話があると、そこへ出掛けて行ったりする。だから一週間に一回の通勤ですよね。その三年間はとても面白かったし、夏になると歴教協の大会に行きました。

歴教協の大会では、必ず現地の先生たちが現地を案内してくれるの。いろいろなテーマでフィールド・ワークを準備してくださいます。その中から一つのコースと

テーマを選んで参加すると、本当に地域をよく知っている人がよく説明してくれて、現地をずっと歩くわけです。私はやはりそれで勉強しましたね。

歴史教育者協議会での取り組みと山田昭次先生との出会い

――『地域に学ぶ関東大震災』編集のときにも聞いたのですが、山田昭次先生とつながりがあったのかなかったのか。実は在学中はなかったとのことでした。

平形　山田先生は助手をされていました。

――そうなんです。

平形　日本史の先生だから私は習ったことはありません。でも名前も顔も知っていました。歴教協大会に山田先生がいらしているのに。「私、立教でお世話になりました」なんていう話をして。山田昭次先生にもずいぶんお世話になっているのです。その後の講演依頼や資料提供とか調査とかね。

だから、歴教協で山田先生に会った際、自警団の特質を調べるときにどの階層の人たちだったのか、そもそも階層があったのかどうかなんていう話をした記憶があります。私は、船橋の資料の中から、それはかなりきちんと出るなんていう話もしました。

あとは、山田先生は「徐兄弟（徐勝氏・徐俊植氏）を守る会」にも一生懸命に取り組んでいらしたでしょう。

――はい。

平形　自分で韓国語を勉強して、ずっと韓国に通いながら取り組んでおられた。そのお知らせをいつも送ってもらっていました。大した力にはなれないので、カンパをするとか、ときには、韓国にはがきを出してくれと頼まれました。だから、山田先生とは卒業後にお付き合いが始まりました。歴教協や関東大震災史研究のときにお世話になりました。そういうふうに考えると、恵まれていたのかなあ。

――縁がありましたね。

平形　あれこれに縁があって助かったのではないかなと思います。いい勉強をさせていただいた先生がいっぱいいらっしゃいます。

ご結婚やパートナーとの馴れ初め

――〔宮川〕一通りお話を聞かせていただきました。あとはこの後、私たちが専修大学での取り組みで聞き取った内容（前掲『地域に学ぶ関東大震災』参照）につながる時期になります。平形さんは職場が移りつつ、また千葉での歴史研究にたずさわり始める時期になっていきますね。

平形　そうそう。はじめの学校には三年間しかいないで

すから。実はその後、結婚したんです。

――そうでしたよねえ。

平形　はい、立教出身の（笑）。でも在学中は、知らなかった人です。文学部日本文学科出身で国語の教師をしていた人がいて、その人と三年たって結婚したんです。

――同僚の方。

平形　はい、同僚で、国語の教師でした。しかも、たぶん安保条約反対運動などを一生懸命やった人だったの（笑）。

――歴教協に誘ってくれた方はいらっしゃったのですか。

平形　はい、立教の史学科の一年先輩です。やはり在学中はその方も知らなかった。

――歴教協でも一緒だったということですか。

平形　「私が行くから一緒に行かない?」とその方が誘ってくれたから、私は歴教協の大会に参加しました。

――パートナーの方は、文学部のご所属だったのですね。

平形　そう、文学部です。小田切進先生のゼミだったと思います。

――はい。

小田切進と近代文学館

平形　近代文学館というのは、立教祭から生まれたとよく聞きます。

――そうなんですか。

平形　小田切先生が近代文学の資料集めを学生と一緒にやったそうです。それで、立教祭で成果を発表したんですって。そのときに「中野重治のところに資料を借りに行った」とか、「自分が中心ではなく別の人だった」とか、いろいろ言っていました。「小田切さんも亡くなっちゃったけどなあ」なんて言って。ともあれ、立教祭から近代文学館の取り組みが始まった。「立教祭からだよ、近代文学館は」ってよく言いますよ。

――パートナーの方が。

平形　はい。「自分は中心ではなかったけど、その一部を手伝った」と。たぶん卒業論文のテーマが黒島伝治で、いろいろな興味や関心があったようです。でも、「あまり勉強していなかった」と言っています。学生運動のほうが一生懸命だったって（笑）。

結婚後の仕事と生活、組合運動

――確か、パートナーの方は教員を継続なさるのですよね。

平形　ええ、最初に勤務した学校に残っていました。私は同校を辞めたけど、辞めるのが悔しかったから、「辞めないで一緒に勤める」と言ったら、「非公然で組合を準備している途中でみんなにまだその力がないから、辞めたほうがいい」と言われました。いま考えると、ずいぶん失礼な気がする（笑）。私のほうが辞めることに

なったのです。

悔しかったから校長のところに行って、「私は結婚して辞めるけど、代わりの職場を紹介してくれ」と言いました。組合づくりをやっていると薄々分かっているのに、早く出て行ってほしいと思ったのか、見つけてきてくれたんです。〔勤めていた学校の〕姉妹校のA校の本校が三軒茶屋のほうにあり、ちょうどA校の新校が東村山にできた。そのため、教師が半分に分かれることになり、新校のほうの世界史の授業を六時間（二日間）分、探してきてくれました。だから勤務校を辞めて、A校に講師として移ったのです。

――女子校でしたね。

平形　A校は女子校です。そこで一年間だけいました。そこでは、本校の教師のクビを切ろうとしていたのね。「そんなばかな」というので、「私学単一[2]」に入って引き取る運動をするわけ。私学単一って分かる？　非公然個人加盟の組合に入っている。

――いえ、分かりません。

平形　私立学校の個人加盟の労働組合です。本校の先生たちと新校の先生たちとが集まって打ち合わせをちゃんとして、いろいろな交流をつくって、本校の先生をみんな移れるように話し合いました。そういう取り組みをいろいろやったわけです。それでうまくいきました。でもうまくいったら、私の時間数がなくなっちゃったわけ。

――それは、本校の教員を引き取ったからですね。

平形　はい。でも、ちょうどそのとき、講師になるときの二日分しかないから、私は私学協会に講師として登録しておいたのね。そうしたら、よっぽど足りなかったのでしょう、東京の私立学校から三月末ギリギリになって求人が電話で来たの。面接に行ったら、向こうもやはり大変だったのでしょう、すぐ採用と決めてくれました。（一週間の平日のうち）残り三日分、仕事が延びました（笑）。だから、辞めた一年目から二つの学校で、講師として五日間、働いていました。

――二つの学校に勤務なさっていたのですね。

平形　そう。講師一年目に二つの学校に行きました。最初はゼロで、六時間になって「ああ、仕事があってよかった」と思ったら、電話がかかってきて増えて、一週間で五日間分、仕事ができた。これはうれしかったです。三年間仕事をしてやっと慣れて、さあ、これからというときに辞めているわけだから、授業ができるというのはすごくうれしかったし、五日だから二日残りがあるので一生懸命勉強して教えました。

――その次の年、つまり卒業して五年目からB校だけでご勤務なさっていた。

平形　A校の仕事がなくなったら、B校が時間数を増や

してくれたの。だから、五年目は週に五日間、行けるようになりました。

――このころの勤務形態は、非常勤ですか。

平形　全く非常勤です。（非常勤の）講師が多い学校でした。担任の数、クラスの数ぐらいしか専任がいないの。ひどい学校です。でも、生徒を教えるのがうんとうれしかったし、一生懸命教えました。

――しばらくB校でご勤務を続けられていた。

平形　大学を卒業してから過ごした教員生活の六年間のうち、前半の三年間が専任で、後半の三年間が講師です。本当に講師は、授業に一生懸命になる以外、やることが何もないから。

――そして、同時期にご結婚をなさいましたね。

平形　はい、教員生活が三年終わって結婚しているの。講師をしながら毎年毎年、専任はどこかないかって探したわけ。ある学園に募集があったので面接に行きました。「二校の教師をしていて幾らもらっている？」と聞かれて、ありのままに言ったのね。そうしたら、「多いですね」と言われたんです。

　その学園はそういう学校だったの。あの首切りがあったところ。「ここには行くまい」と思ったら、向こうから断られました（笑）。合格するはずがないのよね。でもそういう経験をしたりして、結局、探し当てたのが、やはり私学単一をつくっていた船橋学園です。裏の情報では、待遇があまり良くない学校だ、年休がない、交通費がない、低賃金というのは知っていたのですが、もうそういうところに行って自分で変えるしかないなと思えるようになっていたから（笑）。それこそ、いま考えると「もぐり込む」ということだけど、大学の先生に推薦状を書いてもらいました。

――それは井上先生。

平形　住谷先生でした、気軽にそんなことを言えたのは。結局、専任教員として就職できました。成績だけ見て、教師の経験があって、すぐ授業が持てるか、クラスが持てるかと言うから、「いつでもどうぞ」と言って（笑）。それで入れてもらって、四月からすぐクラスと授業がいっぱいありました。専任の職場ができた。それだけでうれしかったですね。

転職と組合運動・生活

平形　就職後、裏で組合づくりをすすめ、その後、公然化しました。だから、講師のときから船橋学園に入ってしばらくの間、ずっと私学単一の組合に登録していました。私学単一というのは、面白いことに、私立学校だけではなく、「医療単一」とか「印刷単一」というものもあります。業界を超えた交流会もあるわけ。だから、私

学の問題だけではなく、交流会はいい社会勉強になりました。今はどうなのかしら?それで船橋学園は三五年間、勤めました。

――そこから三五年になるのですね。

平形　はい。だから、もう長いこといるような顔をしていましたけど、最初は少し年をとった新人だったのです。

――千葉県での取り組みは、船橋学園にご入職して五年ほどたった頃からだと記憶していますが。

平形　船橋学園に就職して二年間は、東船橋のアパートにいたのね。今の東武野田線沿いの住まいに移ったのが三年目で、家を建てました。

――失礼ですが、三〇歳前後ですね。

平形　八年後。ちょうど三〇歳ぐらいですね。今までいろいろなことをやってきて、「地域って面白い」と思っているから、自分の子どもを乳母車に乗せて散歩するときに一生懸命地域を見て歩くし、話を聞くことができければ、一生懸命聴くし。そういった子育てしながらの取り組みがしばらくあり、一九七四年からはちゃんと現在も取り組んでいる関東大震災をテーマとして決めて研究をすすめました。

立教らしくない卒業生だったみたいです（笑）。

――いやいや。

平形　大学とはあまり縁がその後ありませんでした。ただ、当時は住谷先生とは連絡があり、地理研の卒業生とはたまに会ったのかな。

指導者側から見た教育実習

――本学の卒業生のなかにも高校で地歴の教員として活躍している方がいます。ある意味では、平形さんは彼ら彼女らの大先輩ですね。

平形　教育実習は大変なんですよ、面倒を見る側になると（笑）。なぜなら、授業の年間計画があるなかで、その一部の範囲のなかに実習生が担当する部分を決めて、自分の授業を作り上げなくてはならないわけです。実習生が担当した授業をやり直さなくてはならない場合も時にはありました。一方、一生懸命に授業を担当してくれた学生もいるの。「頑張ったね」と声をかけられる学生もいるのだけど、そうではない学生には、実習期間が終わってからもう一回、生徒には分からないように授業内容をやり直したり、補充したりすることがありました。実習生が担当した授業自体は、否定はできないから、そーっと。

ただ面白いのは、教育実習の際、教室の後ろでみている先生に質問してくる生徒もいる（笑）。これは今の現代っ子だわね。でもそれもいいと思うのね、私も授業に入れるから。だから、教育実習はすごく面白い。指導さ

れるほうが大変だと思います。

――〔奈須〕実習校の先生方にはほんと足を向けて眠れないという日々が続きます（笑）。

平形　ハラハラしますよね、終わるまでね。

――はい、もう終わるまで何が起こるか心配で。

平形　私もそう。教員のほうもハラハラしています。

――それこそ実習先の生徒である中学生、高校生たちにもわたしたち大学の教員は責任を持っているはずなのです。中・高の先生方がいらっしゃって、そこに実習生がそれこそいい加減な気持ちで、あるいは気持ちはあっても全然実力が伴っていない授業をしてしまったら、本当に申し訳が立ちません。

平形　でも一生懸命なら生徒のほうは受け止めるのだけど、一生懸命ではないのが少しでも所作に現れると、すぐに生徒は分かってしまいますね。

――分かってしまいますね。

平形　それから、実習生の先生にどういう性格の生徒が関心を示すかで、実習生のタイプが分かったりします。

おわりに

立教女学院出身者から見た当時の立教大学像

――立教女学院という生徒が女性だけの学校から立教大学という男女共学の学校に進まれて、女性の目から見て、その当時の立教大学に対して戸惑いや違和感を感じられたことはありますか。

平形　それは逆でね、私は立教女学院を卒業して大学を選ぶときに、絶対女子大学には行くまいと思ったの（笑）。女性だけではないほうがいいと考えていました。大学では男女共学が当たり前と思ったのかどうかは分からないのだけれども、共学の大学に行こうと思っていたので、女子大学は選びませんでした。受験勉強はしましたが、いろいろと行きたい学校を探して進学方法を選んでいたら、立教大学の文学部史学科や経済学部への推薦入学が選択肢にありました。入試を受けなくても面接と書類だけで大学に入れるのだから、楽ですよね。ほかの受験生には申し訳ないけれども、そういった選び方で、進路希望を「立教大学の推薦」にしました。だから、違和感よりも、共学でよかったと思いました。

それと、こんなことを言ったら怒られるかもしれないけど、立教大学の学生の男の子たちっておとなしいの（笑）。

何て言ったらいいのかな。もちろん、そうではない人もいっぱいいたのだけども、何となくおとなしい感じを受けました。積極性を欠くのかな。自分は積極的に生きていこうと思っていたときだから、一層、おとなしそうに見受けられました。

当時は自分一人でサークルを探していたほどですから、この点でも男女共学に違和感はありませんでした。地理学研究会に入ったときも、上級生に女の人は三人いただけで、私の学年は十何人の中で一人でした。それでも別に困らないし、いやだとは思わなかったです。興味がある人と一緒に集まっていろいろ取り組むことが面白かったためです。あまりいい返事になりませんね（笑）。

――いえいえ、とんでもない。

平形　立教女学院という女子だけのところにいて、そこでおとなしくしていたからこそ、逆に大学入学後はいくらかおとなしくなくなったのではないかな（笑）。

――それでは、インタビューはこれで終わります。どうもありがとうございました。

（1）旧文部省は、一九五六年度より全国の小・中・高の児童と生徒を対象実施した学力調査（一般に「学テ」と呼称）をしていたが、一九六一年度から従来、中学三年生を対象とした抽出調査から中学二・三年生全員を対象とした悉皆調査に転換した。その措置に対する反対・阻止のための行政への裁判闘争を「学テ闘争」と呼ぶ。雨田英一「全国学力調査」（久保義三ほか編『現代教育史事典』東京書籍、二〇〇一年）、四七頁。

（2）後日、平形氏に確認したところ、「私学単一」とは私立学校の単一組織の労働組合を指し、労働者である教職員が直接、労働組合に加盟する形態を単一組合と呼ぶとのこと。

インタビューに答える平形千恵子氏